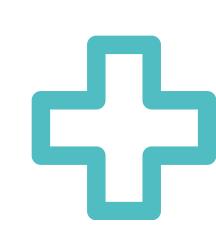
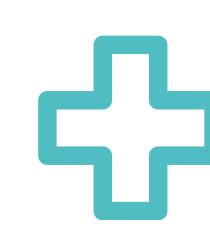


# 100nmの敵を知る



感染症流行期に、あらためて「防ぐ力」を考える



12月18日、リハビリテーション部で今年最後となる勉強会が開催されました。講師は当院の石松副院長。

「100nm（ナノメートル）への理解」という、一見すると物理学のようなテーマでしたが、その中身は今まさに私たちが直面している感染症対策の本質を突くものでした。

## ■ 「サイズ」を実感することから始まる対策

今回の講義で最も印象に残ったのは、病原体の「大きさ」の対比です。インフルエンザウイルスのような100nmという極小の存在を、細菌や寄生虫と並べてイメージすることで、普段何気なく行っている「マスクの着用」や「手指衛生」が、いかに異なる対象を想定すべきものなのか、その理屈が腑に落ちる感覚がありました。「なんとなく」の対策を、根拠に基づいた「確信」に変える。臨床に立つ者として、敵の正体（サイズ感）を正しく認識することの重要性を痛感しました。

## ■ 臨床現場と「食」に潜むリスク

冬の味覚である牡蠣とノロウイルスの関係についても、非常に興味深い解説がありました。牡蠣が海水を濾過する過程でウイルスが濃縮されるというメカニズム、そして加熱調理における温度管理の難しさを説明頂き、調理を行う上で中心まで火を通す大切さを学びました。

回復期リハを担う私たちにとって、患者さんの体調管理は最優先事項です。食中毒リスクやアルコール消毒の限界といった具体的な知識は、日々の介入におけるリスク管理の視点をより鋭くしてくれました。

## ■ 予防医療としての「ワンヘルス」

最後に語られた「ワンヘルス（One Health）」という考え方。人、動物、そして環境が相互に影響し合っているという広い視野は、リハビリテーションを単なる機能訓練として捉えるのではなく、患者様の「生活環境全体」をマネジメントする学問なのだと、改めて背筋が伸びる思いでした。

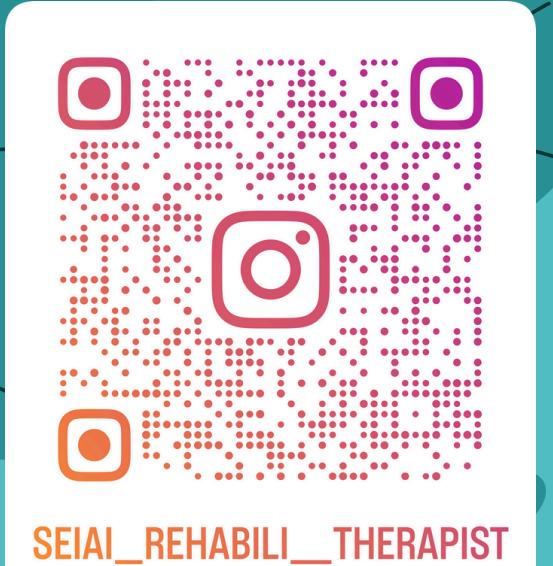
### 【学びを終えて】

勉強会が終わった後の会場は、スタッフ同士で日々の対策を振り返る声が飛び交い、心地よい緊張感に包まれていました。今回の学びを個々のスタッフが持ち帰り、現場での実践に繋げていく。そんな「研鑽の冬」を象徴するような、非常に密度の濃いひとときでした。

リハビリテーション部 課長補佐 小宮盛人



リハビリ部 Instagramはコチラ



SEIAI\_REHABILI\_THERAPIST